

# 「外国人留学生生活実態調査」について

柴田 幹夫

## 調査の概要

### 1. 調査の目的

新潟大学に在籍する外国人留学生の勉学・研究・日常生活状況を把握することにより、留学生に対する福利厚生、修学支援、授業・研究環境、課外活動などの現状を改善するための資料収集を目的として実施した。

### 2. 留学生センターの柴田と、当時の留学生課課長の山崎昭夫が、1999年1月に調査内容について企画立案した。

### 3. 調査の期間

1999年2月1日～2月21日

### 4. 調査の対象

新潟大学に在籍する外国人留学生（1999年2月1日現在 39ヶ国・地域 314名）

### 5. 調査方法

各部局の留学生担当窓口を通じて、調査票を配布し、回収した。留学生センターの学生については、センターの事務を通じて配布回収した。

### 6. 回収

78名から回答を得たので、回収率はおよそ25%。出身国・地域で見ると18ヶ国・地域となった。一部不明。

### 7. おわび

この留学生生活実態調査を1999年の2月に行いながら、2年経った今日、発表するというのは、いささか時期はずれの感を免れることは出来ない。ただ荏苒として今日を迎えたわけではなく、留学生課長の異動やセンター内でのアンケート調査そのものについての異議などが提出されたため、センター内の意見の集約に時間がかかるなど、公表できるまでに時間がかかった。特にサンプル数が少なすぎると言う意見に代表された。少なすぎれば、意味を為さないのがこの種の調査であるということは了解している。しかしながら、実態数は少なかって、参考としては考えられるだろうということで、時間がかかったがここに公開するものである。次回さらに実態調査が必要なときには、今回の反省の上に立ちながら進めていきたいと考えている。

## I 基本的事項

全体としての回答率は、25%であったが、歯学部の実態調査は比較的高く、19名（24.6%）

におよんだ。(表1)次に留学生を身分別に見てみると、国費留学生(研究留学生)からは20名(26.3%)の回答が得られた。(表2)また留学生センターの予備教育生からの回答は得られなかったのは残念であった。日本語能力の面から考慮すると仕方のないことかもしれない。

回答の男女比は44名(男性)、36名(女性)であった。また、回答者の平均年齢は、30.1歳であった。入学年度については、1998年(平成10年)度が、最も多く40名(54%)にも及んだ。(表3)回答者の出身国としては、中国が圧倒的に多く、38名(49%)にものぼった。続いてバングラデシュ8名、ブラジル5名、台湾5名、韓国4名、マレーシア4名の順に続いている。(表4)アジア出身の回答者が極めて多く、実に65名(84.4%)に達した。これは全体の在籍者数から考えてみても妥当な数字であろう。

## II 日常生活について

### ① 住居・食事について

住居については、大学周辺に多いのは予想されていたが、32名(40.5%)が、五十嵐・大学前・内野地区に住んでいた。19名(24.0%)の学生が、新潟市内中心部に住んでいた。これは医学部・歯学部が市の中心部(旭町地区)にあるからだと思われる。

(表5)

住居形態については、半数以上43名(55.8%)が、台所、バス、トイレ付きのアパートに住み、9名(11.6%)が本学の国際交流会館に住んでいた。(表6)会館は家賃も安く、大学構内にあることから、入居希望者も比較的多く、約半数の人が入居を希望している。ただ、限られた人数しか入居できないので、第二国際交流会館の建設など、安くて良質な住居を提供することが必要であろう。

アパートを探すことについては、そんなに苦労をしていないようであるが、中にはなかなか見つからなかった学生も数人いた。アパートの保証人については、本学の教員が44名(61.1%)になっており、比較的高い数値を示している。続いて日本人の知人、友人が続いている。(表7)

なお、留学生センターが中心となって加入を勧めている火災保険には、わずか16名(22.8%)しか加入しておらず、(表8)さらに加入に向けて周知徹底させる必要がある。ただし、家主が自主的に火災保険に加入していることも考えられる。

食事は主としてどこで摂って入るかという質問に対しては、朝食は自宅で自炊が最も多いが、昼食になると学内食堂で食べるという割合が多くなる。また夕食については自宅で自炊というパターンが多かった。

### ② 収入・支出について

留学生の一ヶ月の平均収入については、合計すると121850円であり、奨学金や保証人からの援助が多く占めている。(表9)アンケートを回答した学生が比較的国費留学生が多かったことから平均収入が多いのだろう。また平均支出に関しては、アンケート項目の設定が悪かったため、支出に関しては項目別しか出てこなかった。その結果、食費

が 38320 円でトップを占め、預貯金 34860 円、住居費 27700 円と続いている。(表 10) 生活状況は約三分の一の学生が苦しいと答えている。(表 11) 母国の家計に負担をかけているかという設問については、半数の人が負担を感じているのがわかる。(表 12)

### ③ アルバイトについて

この項目ではアルバイトについて聞いてみた。アジア諸国から多くの留学生が本学に留学している状況と、彼らの母国と日本との経済格差を考えると、一部国費留学生を除けば、ほとんどの留学生がアルバイトをしていると思ったが、結果は全くしたことがないが、実に 30 名 (42.8%) にものぼり、意外な結果が出た。(表 13) 本学には比較的国費留学生が多く入ると、理科系が多く、実験、実習等で忙しく、アルバイトをする暇もない留学生が多いのであろう。それだけ奨学金の拡充が望まれる。

アルバイトが必要な理由をたずねてみると、学業を続けるための 29 名 (38.1%) で、次に家庭の経済力負担を軽減するため 17 名 (22.3%) と続く。この回答はどういう意味があるのであろうか。家庭を持った留学生がどのくらい存在するのかはよくわからないが、海外送金などを考えてみなければならないかもしれない。(表 14) このことは、前述の表 12 の結果を裏付けることにもなる。

アルバイトの業種については、飲食業に従事するものは最も多く 19 名 (30.6%) いた。いわゆる皿洗いからはじまる極めて簡単な単純労働であり、また食費代が浮くなど実利的な面でも、この職種が多くなったのであろう。続いては留学生の特性を生かした語学教師のアルバイトが多い。(表 15) さらにアルバイトをする時間については、一週間に 5 時間未満が一番多く 14 名 (32.5%)、10 時間未満が続いている。(表 16)

このアルバイトの項目からは、あまりアルバイトもせずに勉学生活中心の留学生を送っている留学生の姿が浮かんでくる。アルバイトをしないので学業に対する支障もあまりなく、15 名 (34%) の学生がほとんど支障がなかったと回答している。成績が悪くなったと答えたのはわずか 1 名だけであった。(表 17)

## III 大学生活について

### ① 奨学金・授業料減免について

奨学金については、54 名 (71%) の人が受給している。こ比較的多くの留学生は奨学金を受けている。日本政府による奨学金受給者が最も多く、32 名 (60%) 居る。続いて国際教育協会による学習奨励費が 12 名 (22.6%) と続く。(表 18) 民間団体による奨学金受給者が少ないのが気にかかる。本学では私費留学生を取り巻く環境整備の一環として、奨学金問題を全学的な問題として考え、私費留学生奨学金制度を抜本的に改めようとしているところである。奨学金の金額はという問いには、31 名 (56.3%) が 15 万円以上と答えた。つぎに 3 万円から 5 万円未満が 8 名 (14.5%) いた。国費留学生の回答者が多かったため、奨学金の受給額が多くなったと思われる。(表 19)

授業料免除については、39 名 (59%) の人が全額免除と答えた。授業料免除制度を知らなかった人や、その他と答えた人が多くいたのは、これもやはり授業料免除に関係の

ない国費留学生が多く回答したものと思われる。(表 20)

## ② 健康について

異国の地で暮らす留学生にとって、健康問題は学業とともに大きな位置を占める。大学入学前にかかった病気はほとんどの留学生はないと答えているが、入学後では、胃や腸の病気が増えているのがわかる。ただ基本的には留学生は健康なようだ。またケガについては、入学後は交通事故が少し増えている程度である。飲酒についてはほとんど飲まない人が圧倒的に多く、64 名 (82%) にもおよぶ。喫煙についても 67 名 (84.8%) の人がほとんど吸わないといっている。

本学の保健管理センターを利用したかどうか聞いてみた。32 名 (41.5%) の留学生が利用したことがないと答えた。役に立ったと答えた人は 29 名 (37.6%) だった。(表 21) 定期健康診断については、47 名 (61.8%) の人が受検したといい、29 名 (38.1%) の人が受検していないと答えた。(表 22)

## ③ 日本語について

まず最初に留学生の日本語能力について聞いてみた。満足、非常に満足と答えた人は、30 名 (38.9%)、不満、非常に不満と答えた人は 47 名 (61.1%) であった。自分の日本語能力に決して満足していない留学生が多くいることがわかった。(表 23) ただ日常生活では問題なく日本語ができる留学生が 47 名 (53.1%) だいたいできる学生は 29 名 (36.7%) にも達し、両方併せるとほとんどの留学生は、日常生活についてはほとんど日本語がわかるということである。このアンケート自体日本語の設問に日本語で答えるという方式をとっていたので、このアンケートに回答できる人はそれ相当の日本語能力を有しているのである。その反面、この設問に答えられなかった人は、日本語の能力はかなり劣ると考えられる。日本人の友人、知人との会話もほとんどの人が、できる、だいたいできるという人は 66 名 (83.5%) いた。専門科目の先生と日本語ではなせるかどうかについても、ほとんどできると答えたのは、実に 61 名 (77.2%) に及んだ。クラス、ゼミ、学会などで日本語で発表できるかどうか聞いてみたら、52 名 (65.8%) の人がだいたいできると答えた。(表 24) 以下、日本語の講義を理解できる、日本語のテレビ、ラジオを聞いて理解できる、日本語の新聞が読めるかどうか、レポート論文が日本語で書けるかどうか、について聞いてみたところ、おおむね 60% 以上の人が、だいたいできると答えた。ただし、20 名前後の人 (25% 前後) は日本語はあまりできないと答えている。

日本語コースの授業に出席している人は、55 名 (71.4%) にも達している。15 名 (19.4%) の人が自分に会うコースがないために日本語のコースに参加していない。(表 25) 続いて、日本語が必要かどうか聞いてみた。実に 67 名 (87.0%) が必要だと答えている。(表 26) やはり日本で生活する以上日本語が必要であるというのは当たり前のことである。その反面、13.0% の人は、日本語が必要ではないと答えているが、この数字をどう見るか、難しい所である。

#### ④ 大学の教育内容について

大学の専門教育については、49 名の人 (71.0%) が非常に満足、満足していると答えた。ただ 30% 近い留学生があまり満足していないという結果となった。(表 27)

続いてチューター制度について聞いてみた。満足かどうかについては、25 名 (62.5%) の留学生が満足であると答えたが、回答者が非常に少なく、決してこの答えを以って代表しているとは考えることはできないだろう。(表 28) おおむねチューターについては同様の答えが続いている。

#### ⑤ 生活面の悩みや交流について

異国の地で生活を送るということは、また実にさまざまな経験を繰り返すこととなる。いい経験もあれば、また人に言えないいやな経験をしたこともあるだろう。ここでは、生活面でのさまざまな悩みについて聞いてみた。現在深刻な悩みがありますか、という質問に対しては、38 名 (52.7%) が悩みがあると答えている。ないと答えたのは 31 名 (43.0%) であった。(表 29) 半数以上の人、何か悩みを抱えていることがわかった。ではその悩みとは一体何であろうか。多いものから順に行くと、29 名が勉学上のこと、28 名が経済的なこと、22 名が将来の進路のことで悩んでいる。(表 30) この悩みについては、複数回答である。悩みの解消方法としては、21 名 (32.8%) の人は、悩みを自分で解決すると答えた。また 19 名 (29.6%) の人は、先輩や友人に相談すると答えた。教員に相談するのは 10 名 (15.6%) に留まった。また保健管理センターを利用すると答えたのは誰もいなかった。(表 31)

概して留学生は、日本人との交流が少ないといわれているが、このことについては、新潟大学の日本人学生と交流をしていますか、という問いに対しては、していると答えたのは、24 名 (32.8%) であった。あまりしていない、していないを合わせると 27 名 (36.9%) もいた。(表 32) 地域住民との交流については、49 名 (70.0%) の人が交流をしていないということである。しかしながら、交流を希望する留学生は 47 名 (67%) にも及んでいる。(表 33) 次に指導教員との交流について聞いてみた。非常に満足、どちらかといえば満足、満足というプラス面を答えた留学生は実に 64 名 (86.4%) に及んだ。おおむね留学生と指導教員との関係が良好であるということがわかった。(表 34) ボランティア経験の有無については、24 名 (32.8%) が経験ありと答え、49 名 (67.2%) がなしと答えた。(表 35) ボランティア経験のある人は、国際交流関係のボランティア経験者が 16 名 (48.4%) と比較的多かった。(表 36)

国内旅行の経験があるがどうかも聞いてみた。54 名 (72.9%) の人が国内旅行を経験していると答えた。観光と学会参加が多かった。

教員に期待するものとはという問いには、20 名の人、学問の厳しさを教えてほしいと答え、17 名が、学生と日常的に個人的なかかわりを持ってほしい、とか、対話の場を持ってほしいと答えた。14 名が研究者よりよき教育者になってほしいと答え、11 名が社会的実践との結びつきを身を以って示してほしいと答えた。裏を返して考えてみる

と、実に教員の多くは留学生と個人的なかかわりが無いということがわかるし、学問の厳しさもあまり教えていないようである。(表 37)

指導教員との関係が良好であるといいながらも、留学生の中では、教員があまり留学生と関係を持ちたがっていないというのは、どういうことであろうか。今後の検討課題としておこう。

#### ⑥ 授業について

現在のカリキュラムについては、満足が 36 名 (52.9%) と半数以上を占めるが、非常に不満、満足していないとどちらともいえないを合わせると、32 名 (47.1%) にも及んでいる。(表 38) 留学生の声に耳を傾ける必要があるかもしれない。授業にはしっかりと出席しているようである。53 名 (76.8%) の留学生はほとんどの授業に出席していると答えている。(表 39) 受けている授業に不満のある人は、比較的少なく、12 名 (17.3%) が不満であると答えた。(表 40) その理由としては、内容が難しく理解できないと答えたのが、8 名で教員の教え方に工夫がないと答えた人も 6 名いた。(表 41)

#### IV その他

最後の項目は、主として進路のことである。どのような進路を希望していますか、という問いには、29 名 (38.1%) の人は母国に帰国し就職すると答えた。続いて 16 名 (21.0%) が日本の他大学や他の大学院への進学を希望している。日本での就職希望はわずか 1 名だけであった。(表 42) 留学生が卒業後に進路選択で重要視するものは何ですか、という問いには、31 名が就職先の将来性や安定性と答えた。また 28 名が自己開発の可能性と答え、26 名が収入と答えた。(表 43) 最後にどんな人生を送りたいですか、と聞いてみたら、29 名がまじめに働いて安定した生活を送りたいと答えた。25 名は愛情ある生活を送りたいとし、24 名が経済的に豊かな生活を送りたいと答えた。(表 44)

#### 《自由意見》

- ・ 医学部なので、日本人の先生たちとよく交流できないのですが、なぜでしょうか。多分日本の医師は皆お金持ちで、そして我々留学生は皆貧乏だからだと思います。でも、それも事実です。そして、今の奨学金制度について、ひとこと言いたい。今は、3・4年生の留学生は奨学金を受けやすい。むしろ1・2年生など日本へ来たばかりの留学生が、もっと応援が必要なのではないか
- ・ 大学院への進学は自分の人生における幸いであると思っています。日本での生活は大変ですが、いい経験になるのでしょうか。日本人の感情を知りたいです。自分の理想も実現させたいです。これからも皆さんの支えでくれる状態でがんばります。
- ・ ①日本語を勉強するために留学生センターの本を使いたい。②新潟大学の図書館は会館時間が短い。せめて夜中までやってほしい。③時々図書館の1階を使用するが、4時以降と週末は開放していない(ので改善してほしい)。④新潟大学の先生方は個々の研究室に雑誌を保管しているようだが、それらを図書館に置いてほしい。そ

うでないと大学院生たちが研究しづらい。

- ・ 語学コースに通っている人もいるようだが、流暢な日本語を話せるようになるのは、とても難しいと思う。もしも語学コースが新規の留学生全員の必修であったならば、とても役立つものになるだろう。語学コースは6ヶ月とし、前半の3ヶ月は日常会話を、後半の3ヶ月は各学部の専門用語を学ぶのがよい。それが学業の基本である。私は、指導教官や他の医師たちとは英語でコミュニケーションをとれるので問題ない。研究指導も英語で受けられる。これから3年次になるのだが、語学コースに入るのは難しい。新規の留学生たち用の6ヶ月の語学コースが始まれば、きっと彼らに役立つはずである。
- ・ すみませんが、質問事項が非常に長かったので、次回は質問を英語でしてください。
- ・ 外国語としての日本語学習はとても難しく、日常会話に支障が出ないほどのレベルになるにはたいへん時間がかかります。しかし、日常会話レベルでは、私たちの専門講義を理解することはできません。研究に関して、私は全く問題がありませんでした。というのは、私のアドバイザーたちは非常に英語が上手く、彼らは自分たちの時間を多く割いて私に熱心に指導してくれています。そして図書館では英語で書かれた専門書や雑誌を調べることができます。しかし、私は日本の臨床方法や技術についてできるだけ多く学びたいと考えています。私たちは、日本語での、非常に面白くかつ斬新なテーマに基づいた発表・講義・演習にほぼ毎日参加しています。私は日本に来てすぐ日本語の勉強に打ち込みました。そして現在は日常会話レベルに達しています。しかし、日本滞在4年が過ぎる今でも、まだ私は理解できない講義がたくさんあります。これは大変ストレスが溜まります。私たちの専門分野での専門用語は、漢字の知識を必要とするものであり、そのレベルは6ヶ月の日本語集中コースでは補えないレベルにあって、私たち外国人にとって大変難しいです。よって私は、日本語の医歯学用語の集中コースというものがあれば、私たちはかなり多くの講義を理解できるような役割を果たすと思う。そうであったとしても、外国人留学生が日本語の専門講義や演習を十分に理解できるようになるには、多くの年月が必要である（そしてその頃には学生はまもなく卒業し帰国するであろう。）
- ・ よって、日本の診察・治療方法・技術について学ぶ外国人留学生の手助けをするため、さらなる英語での活動もまた望まれる。そうすることで留学生は、帰国後にすすんで実践や指導を行えるのである。
- ・ 私は、発展途上国から来ました。日本で技術を学ぶのが目的です。しかし、自分の時間を有意義に使う機会がほとんど無いというのが現実です。その第一要因は、言葉の問題です。私たちの教育環境は、私たちが時間を有意義に使えるようになるべきだと思います。
- ・ アンケートの項目が多すぎる。本当に意味があるのか？ 私が卒業するまで何も変わらないと思う。

- ・ 授業について①留学生センターの授業を受けたけどあまり適当なコースがないと思う。授業を受ける学生のレベルに応じて授業する先生はいない。②日本の社会・文化・歴史などについてたくさん知りたいと思っているが、大学にはそんな授業はない。留学生センターに「社会文化」という授業はあるが、聴いてみたところ、それは初級者向けの英語でやる授業でがっかりした。日本の社会文化を紹介するのに、わざわざ日本の大学へ勉強しに来た留学生向けに。
- ・ 50分の昼休みはどうもゆっくりできない。現在の50分を少なくとも60分にのばせばいいなあと思います。
- ・ 私は私費留学生として、経済と日本文化を勉強するため日本に来ました。毎日一生懸命勉強しています。だが最低限の生活を維持するため、アルバイトをしています。奨学金が私費留学生にとって、とても重要だと思います。奨学金がもらえたら皆がアルバイトをやめて勉強に専念できるようになると思います。だから奨学金の募集人数を増やして、選考方法を開示して、その公平さを示して頂きたいです。
- ・ この設問はとても長くて理解しづらいように思う。よって、より簡単な構成かつ英語と日本語の両方で書かれたものにしてほしい。そうすれば、日本で学ぶ留学生たちが簡単に設問に答えられるようになる。(腎臓構造病理)

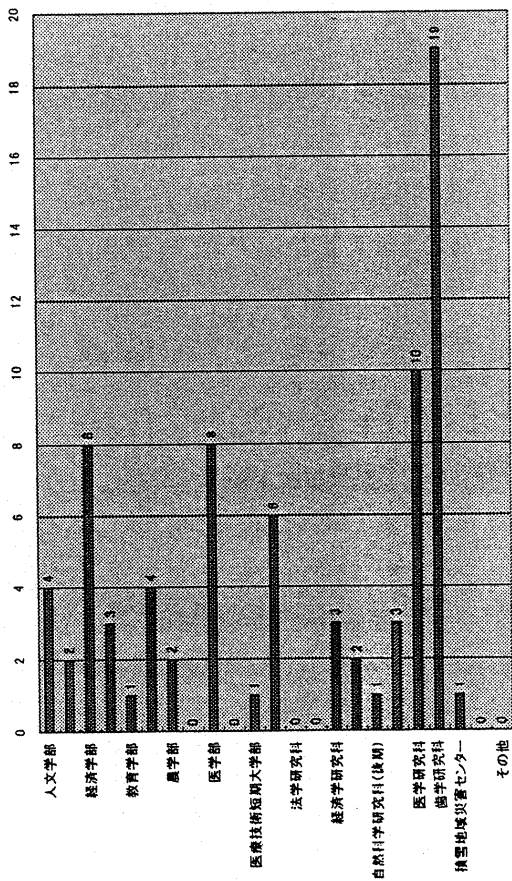
おわりに

今回実施した外国人留学生生活実態調査項目は、実に175項目にも達した。本来回答されたすべての項目について、分析を加えなければならないのであるが、今回はそれをしなかった。もちろん単純集計の段階では、すべての項目について集計したわけであるが、ないようそのものを分析する段階において削ったのである。その理由としては、数年前新潟大学学生部によって全学の学生に対して生活実態調査が実施されたことがある。留学生の生活実態調査についても、本学の日本人学生と比較することが必要であると考えられていたので、項目を立てるときに、日本人用の項目も取り入れてしまったのである。しかしながら、留学生の実態と日本人の生活実態については、同じ項目では意味を為さない所が多々あることが判明した。そこで、担当者の責任で留学生に必要な項目だけに絞って分析を試みたのである。さらに、項目が多すぎたので、満足するようなサンプル数が得られず、また回答者数にもばらつきが多く見られた。このような状態の中で、すべての項目を分析することは出来ないと感じたのである。ただ、担当者自身、調査項目の立て方から分析の仕方まで全くの門外漢であるので、多くの方々の批判は甘んじて受けなくてはならないと考えている。

ただ、今回このような形で外国人留学生生活実態調査が、不完全ながらも初めて行われたことについては、良しとしなければならないだろう。次回の調査のときには、さらに完全なものにしたいと考えている。今回協力していただいた留学生に皆さんと、各部局の協力教員の先生方に感謝したい。さらに集計の整理を手伝っていただいたセンター教務補佐員の佐藤美保さんにも感謝したい。

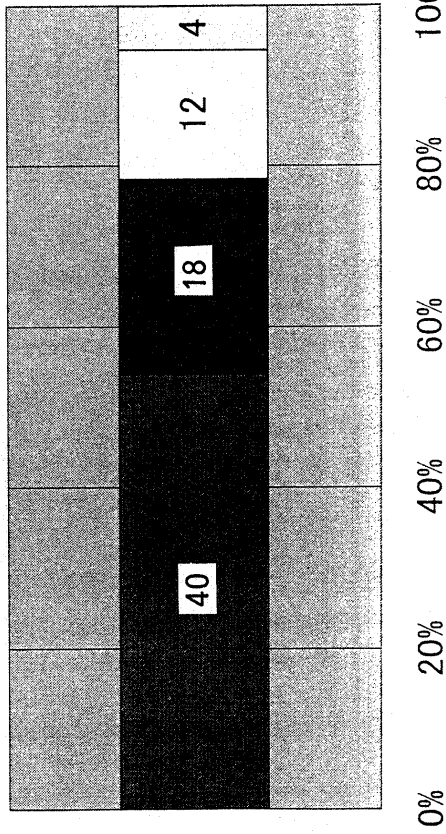


(表1)

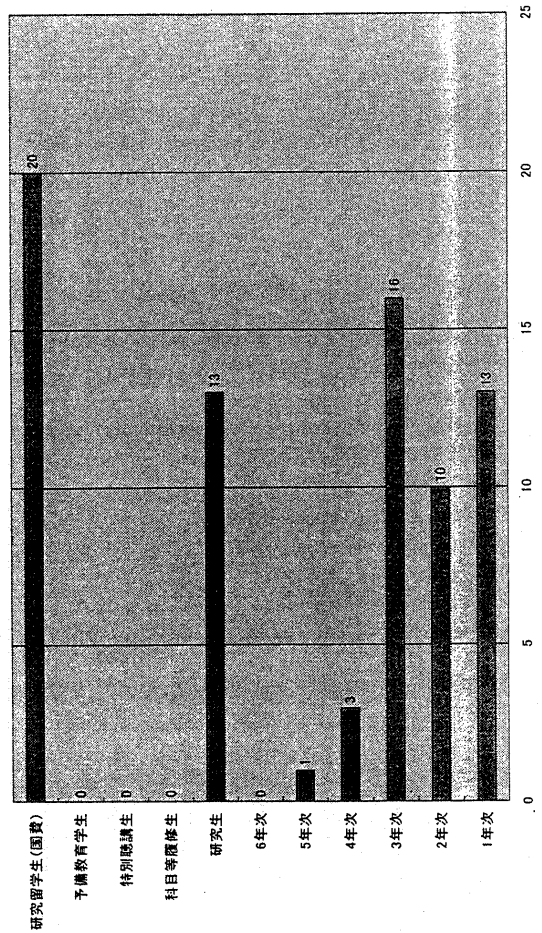


(表3)

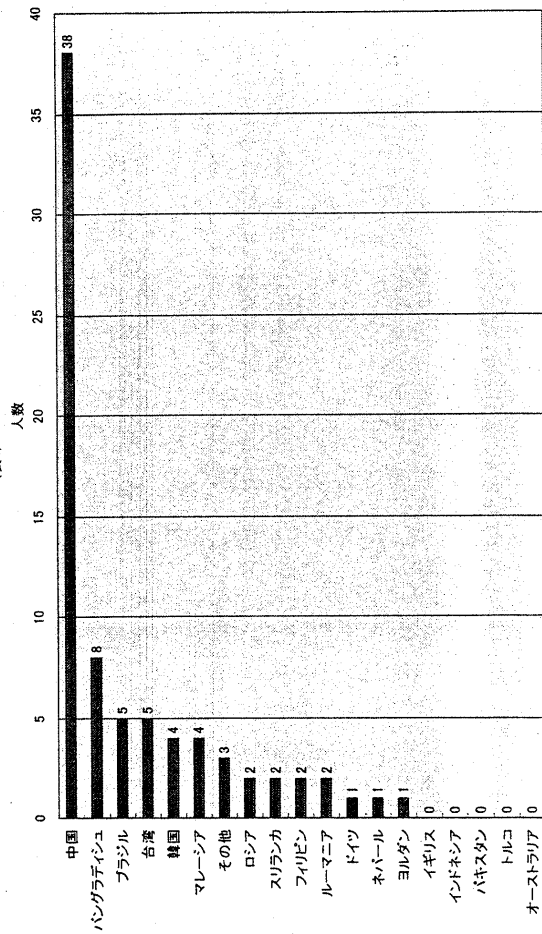
■ 11年度 ■ 10年度 □ 9年度 □ 8年度



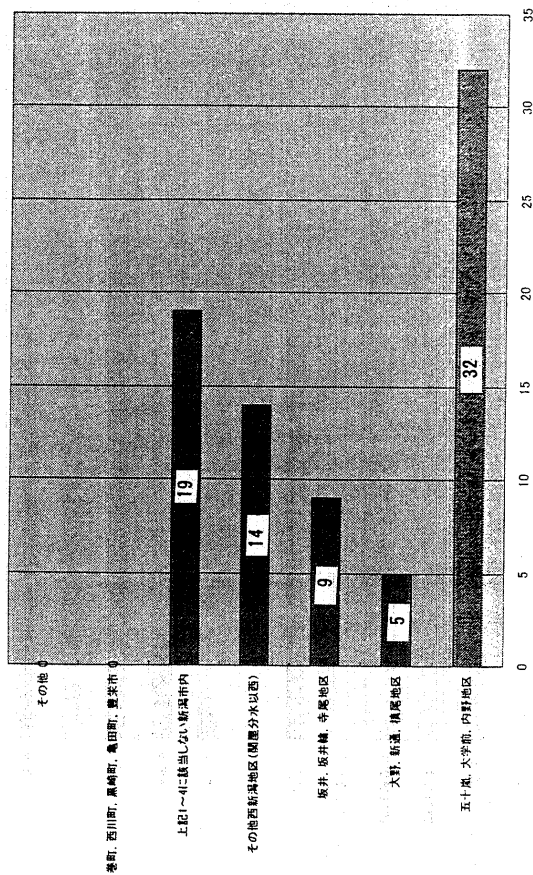
(表2)



(表4)

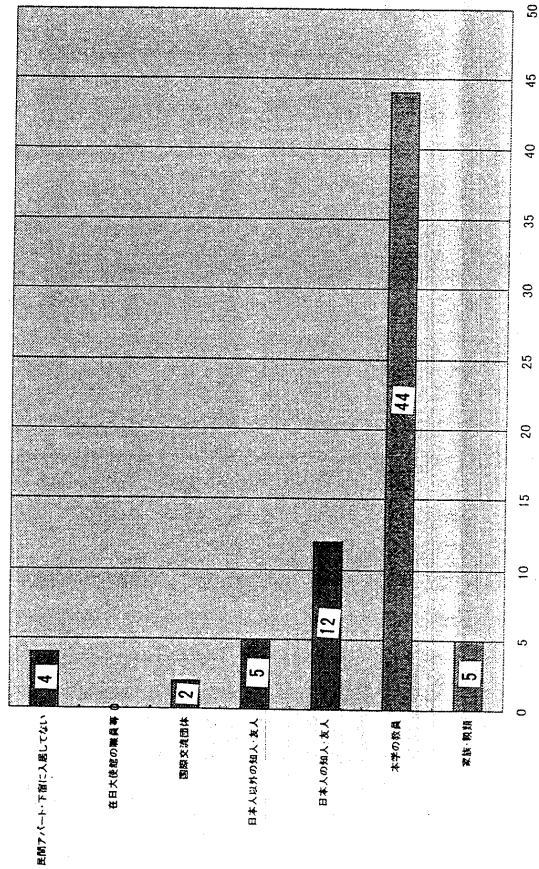


(表5)



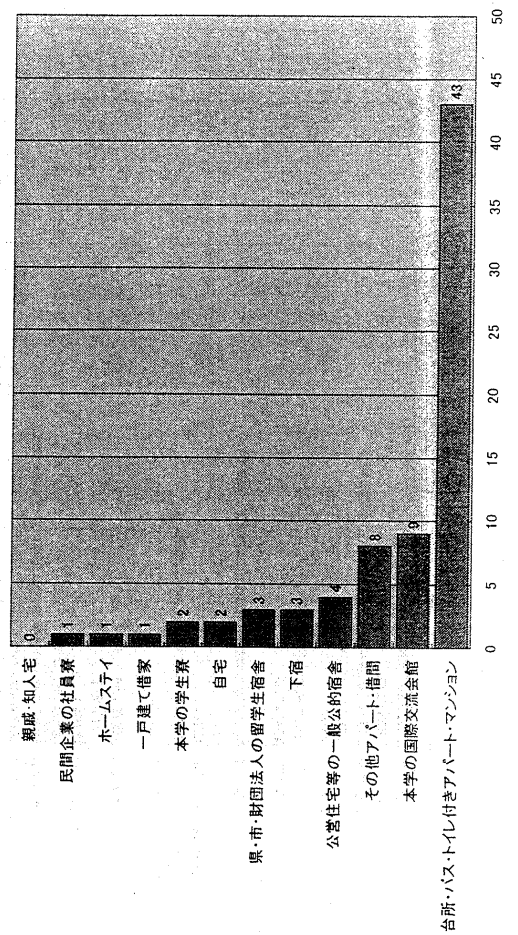
問12

(表7)

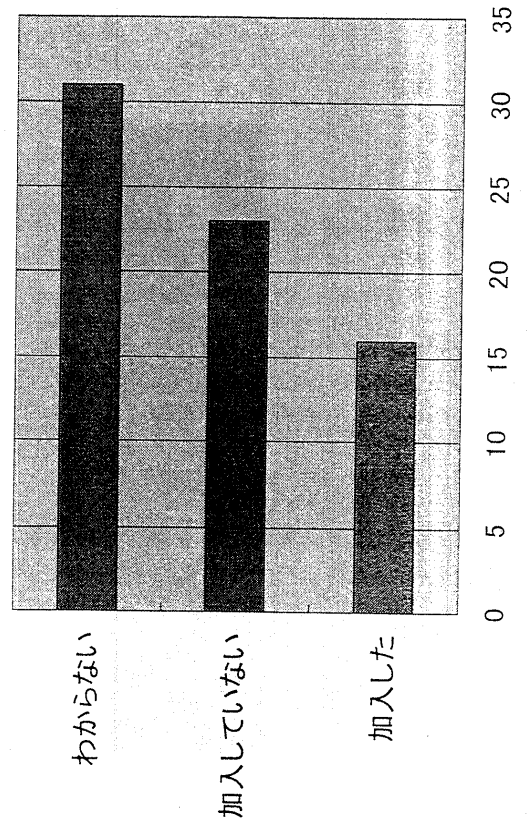


問19

(表6)

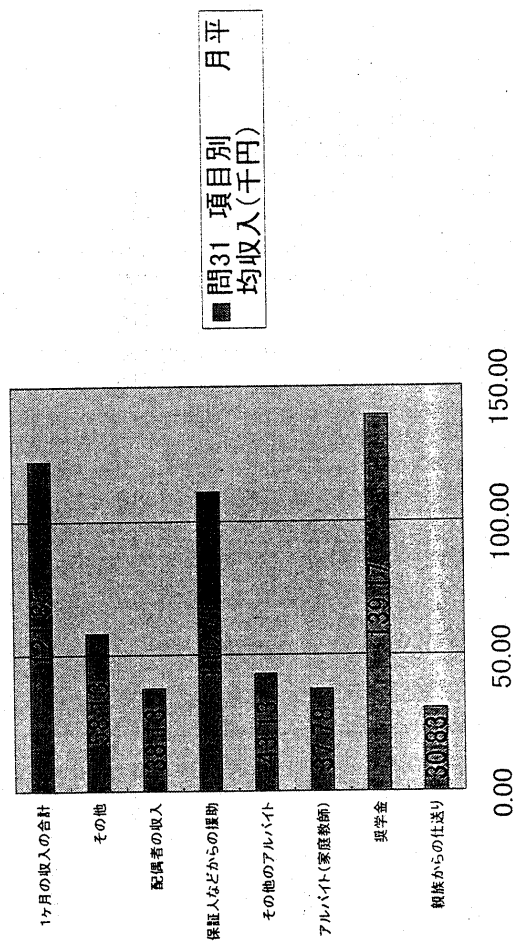


(表8)

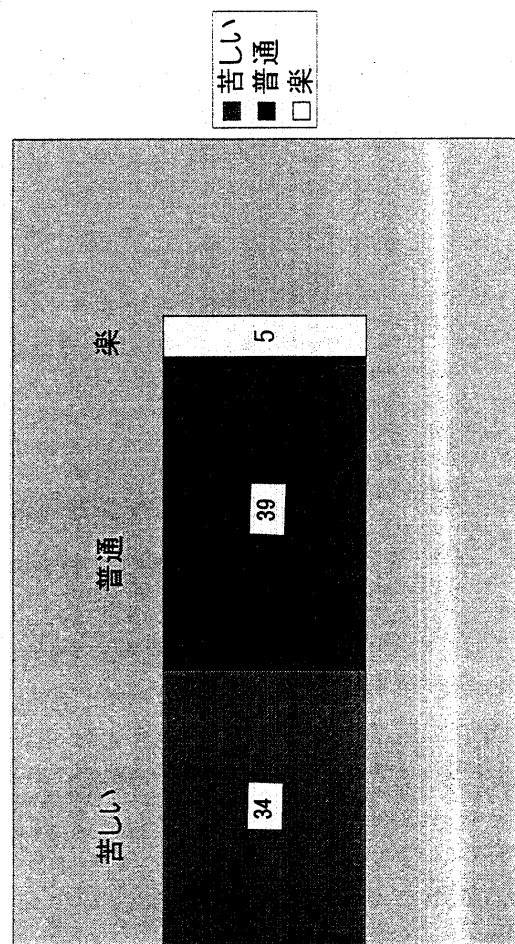


問20

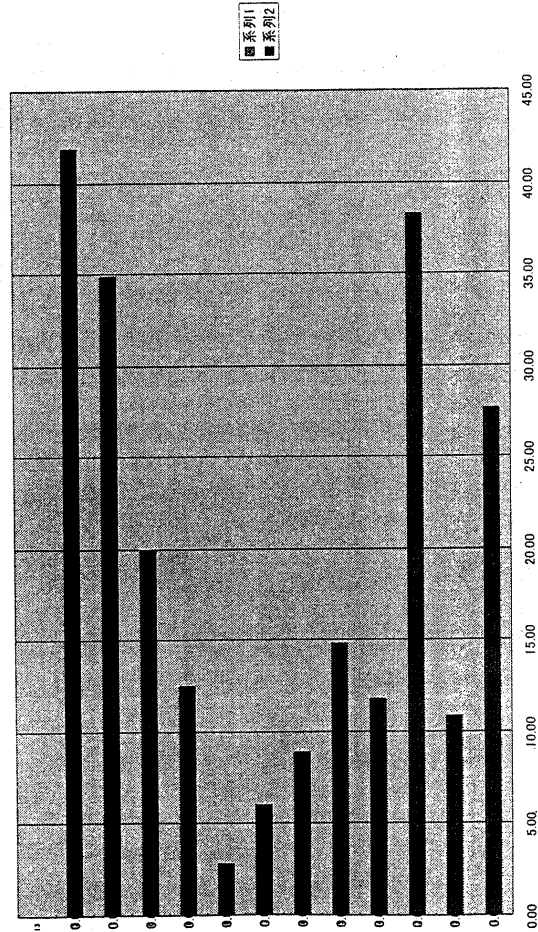
(表9)



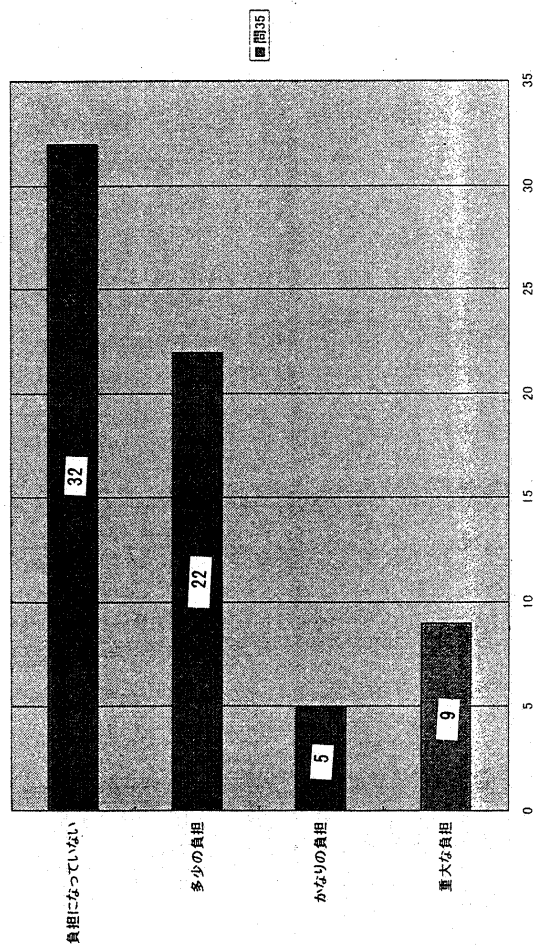
(表11)



(表10)

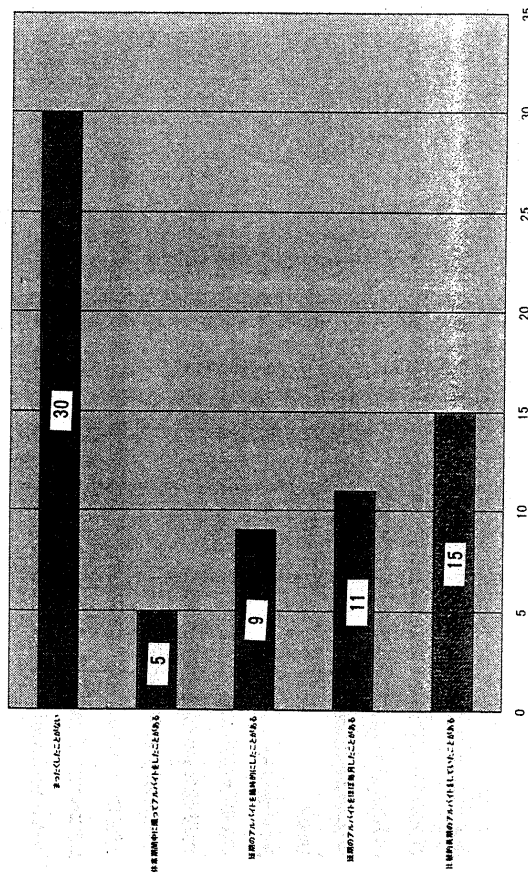


(表12)



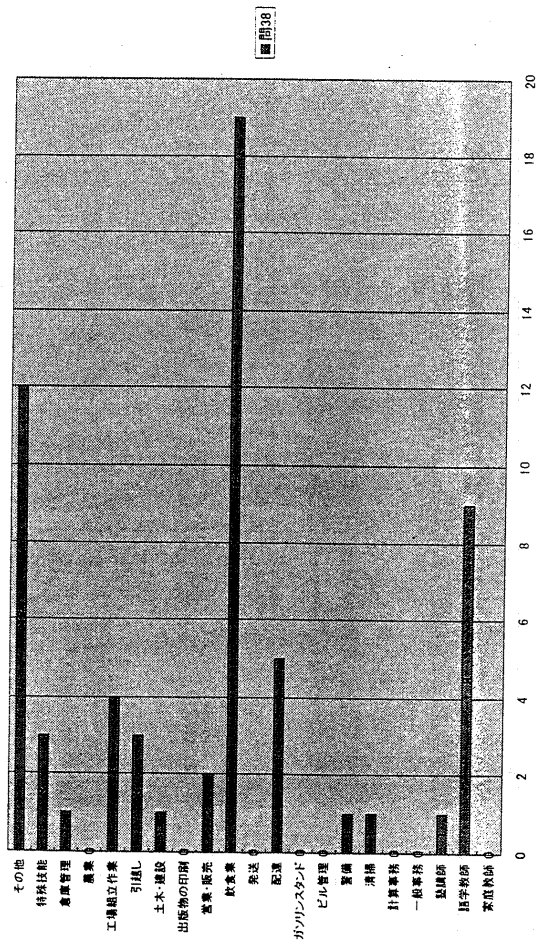


(表13)



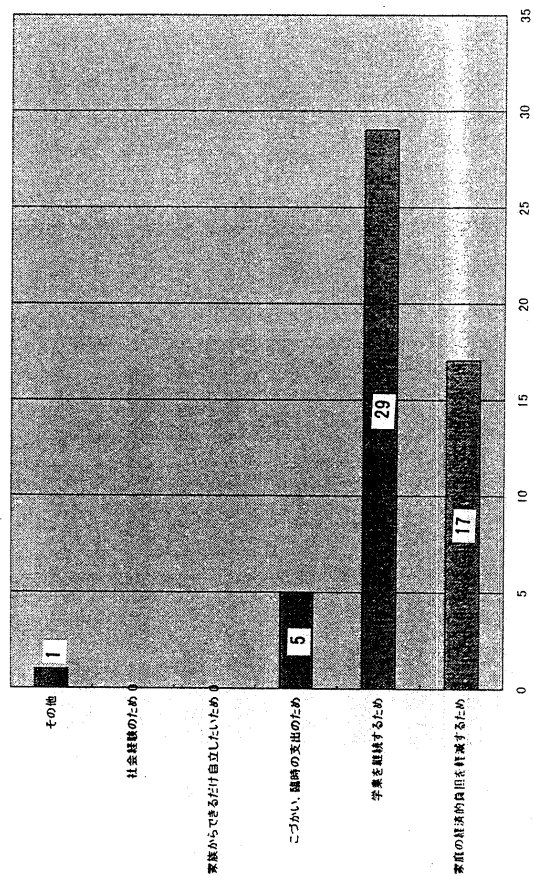
問36

(表15)



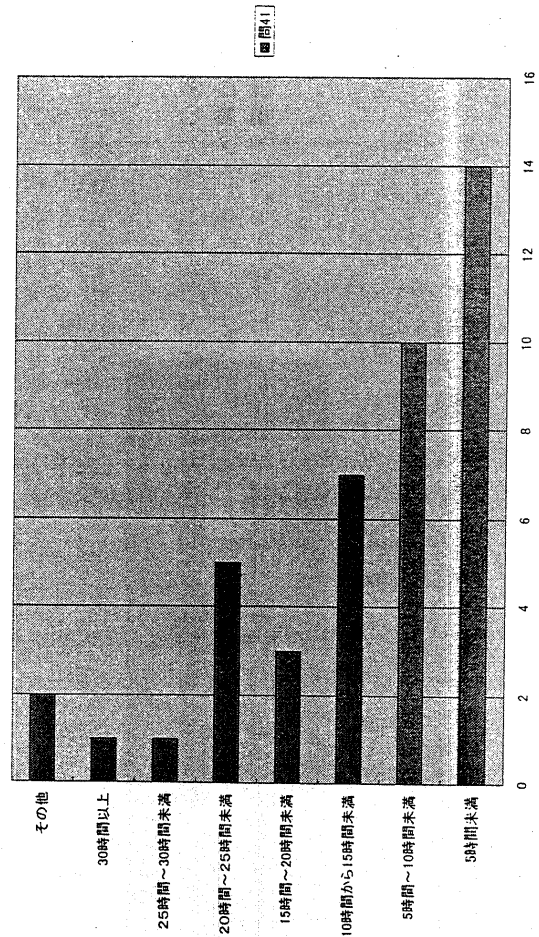
問38

(表14)



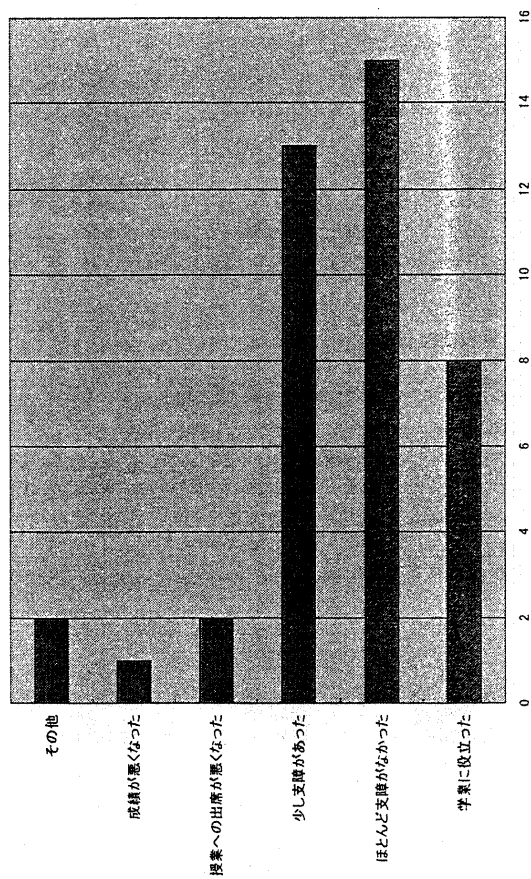
問37

(表16)



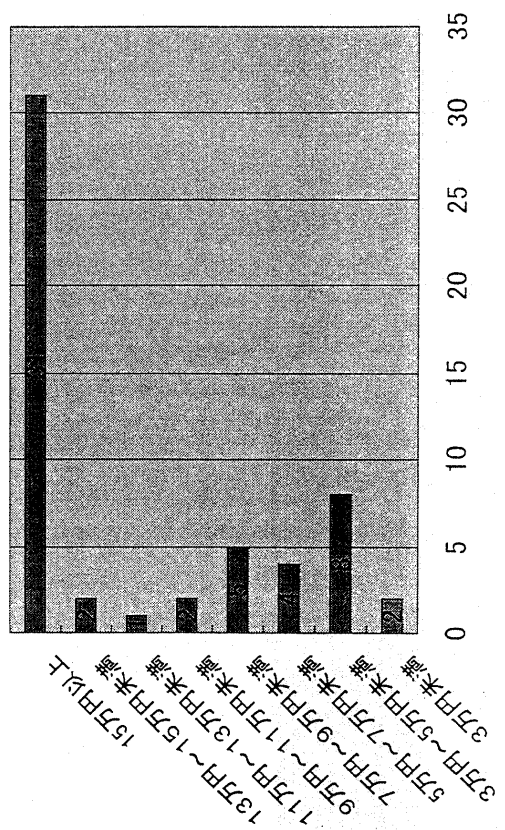
問41

(表17)



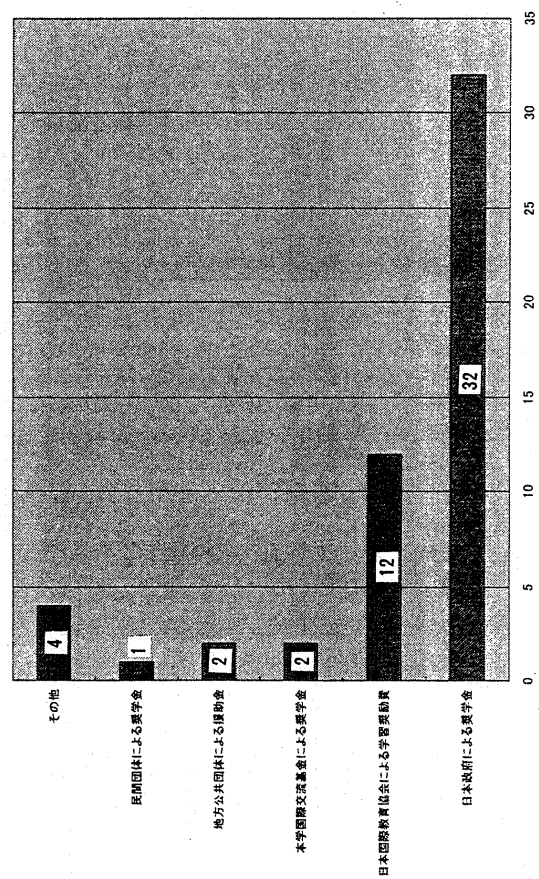
問44

(表19)



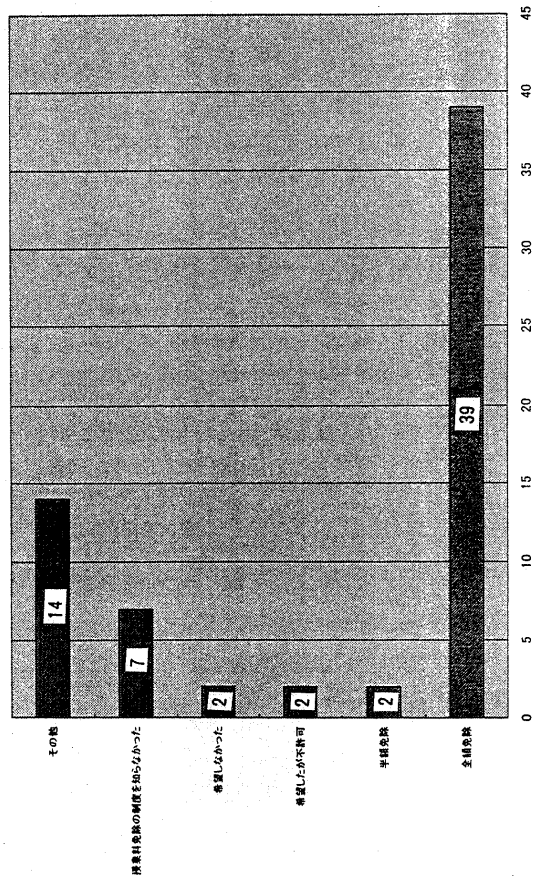
問50

(表18)



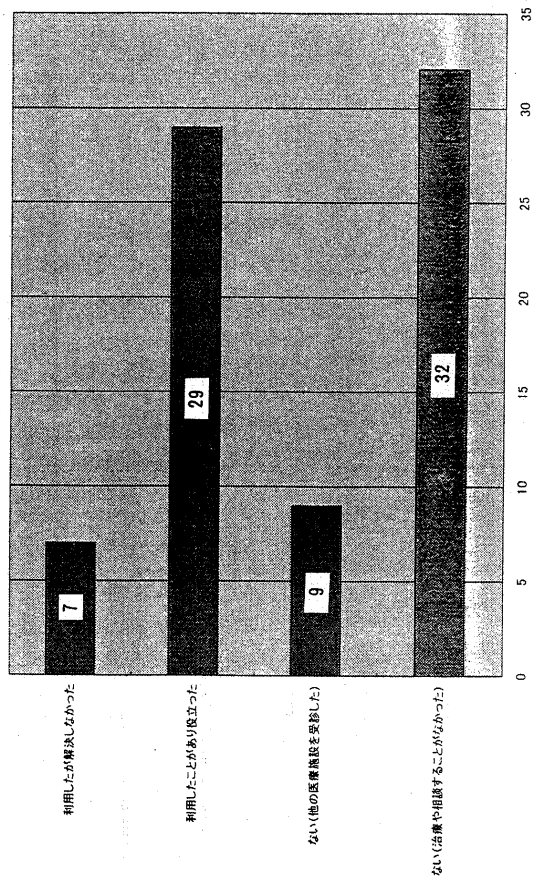
問48

(表20)



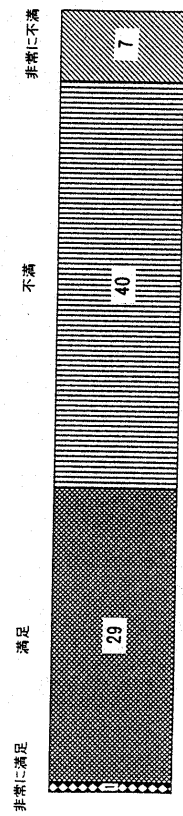
問53

(表21)

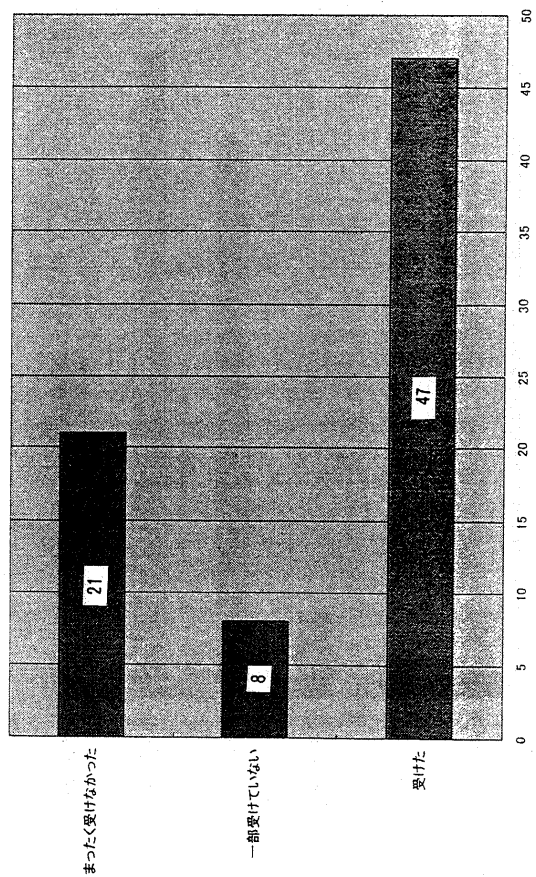


問74

(表23)

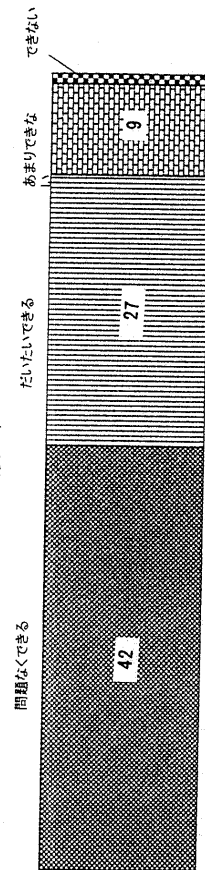


(表22)

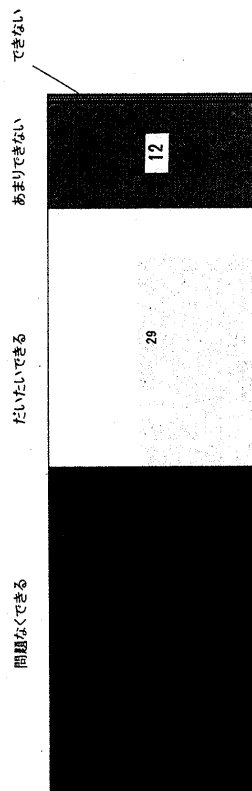


問75

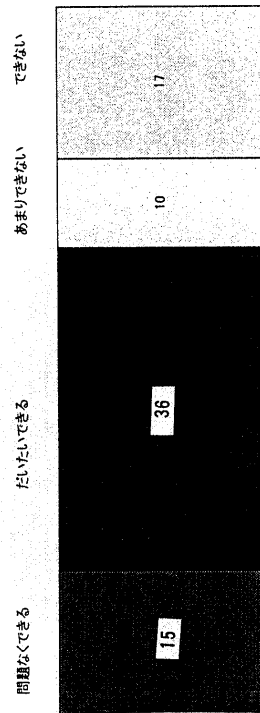
(表24)



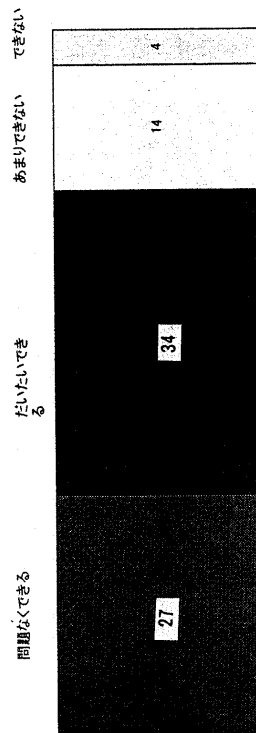
(表 24)



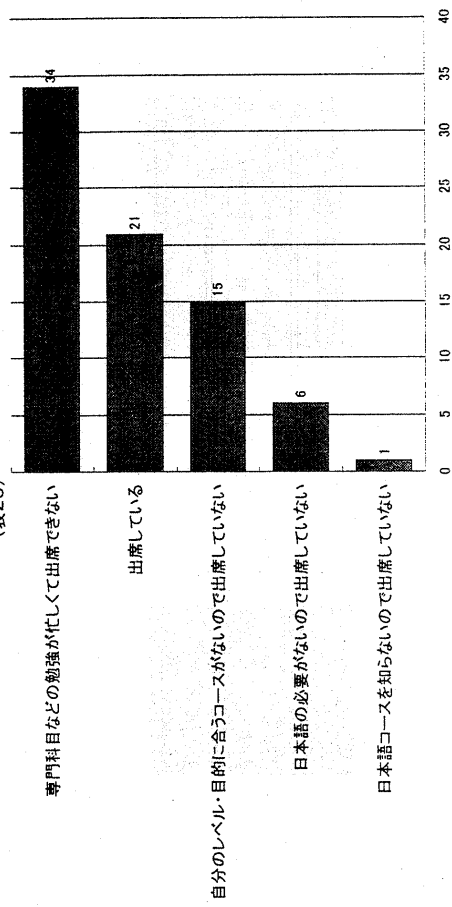
(表 24)



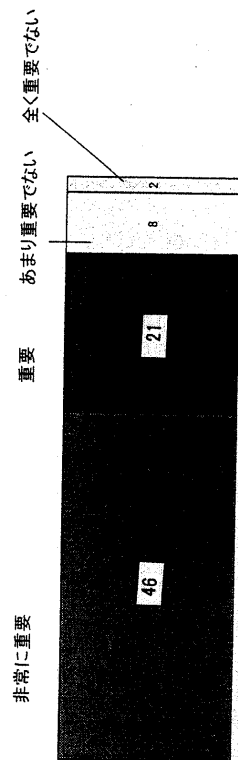
(表 24)



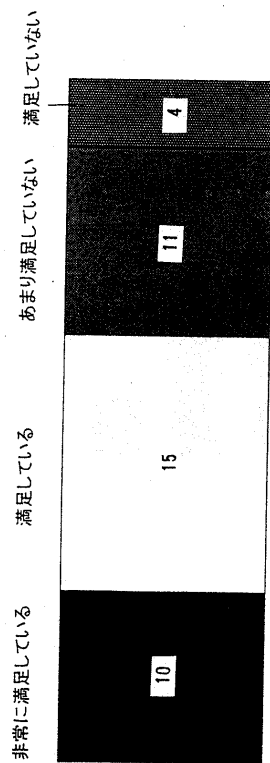
(表 25)



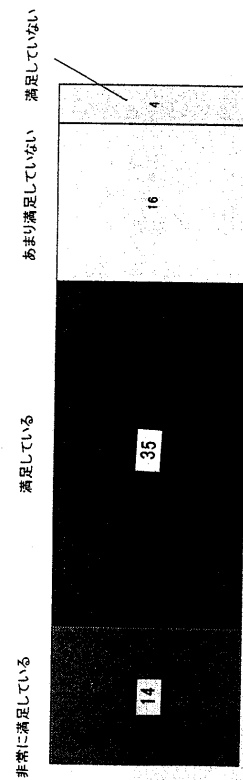
(表26)



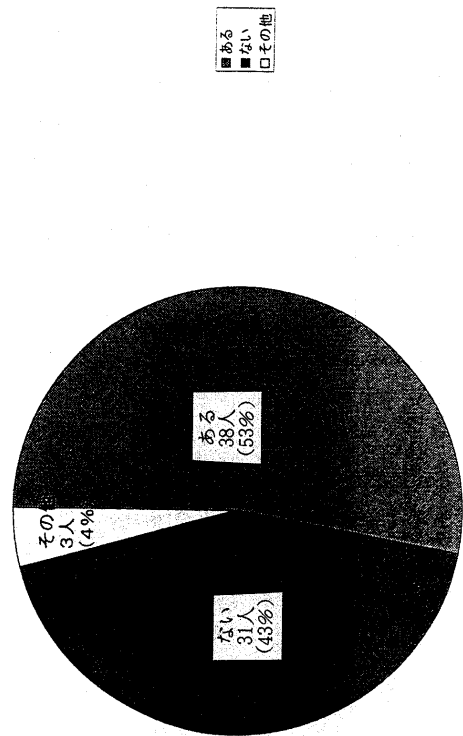
(表28)



(表27)

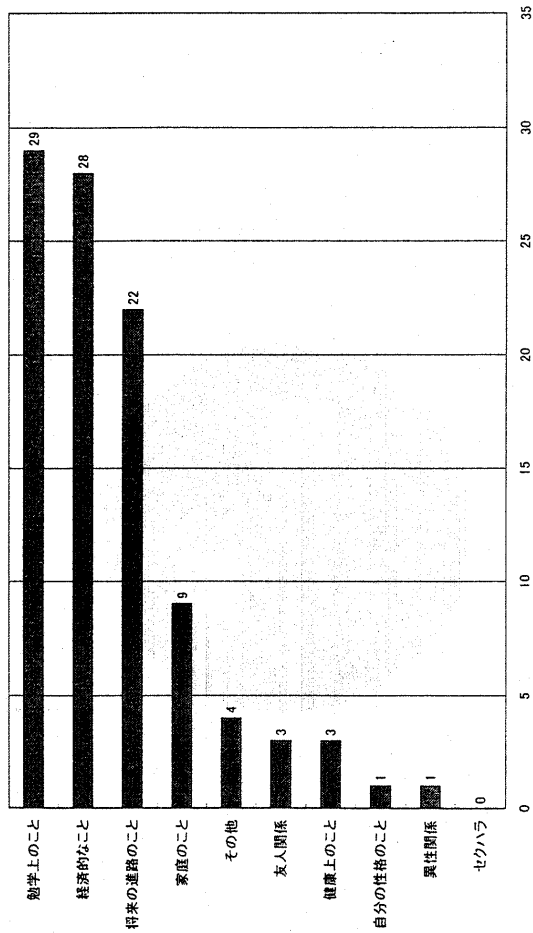


(表29)

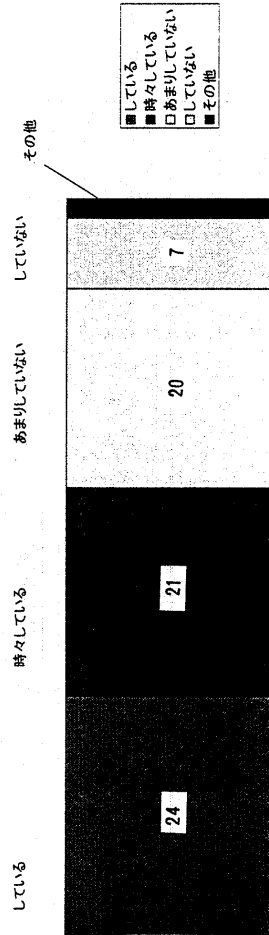




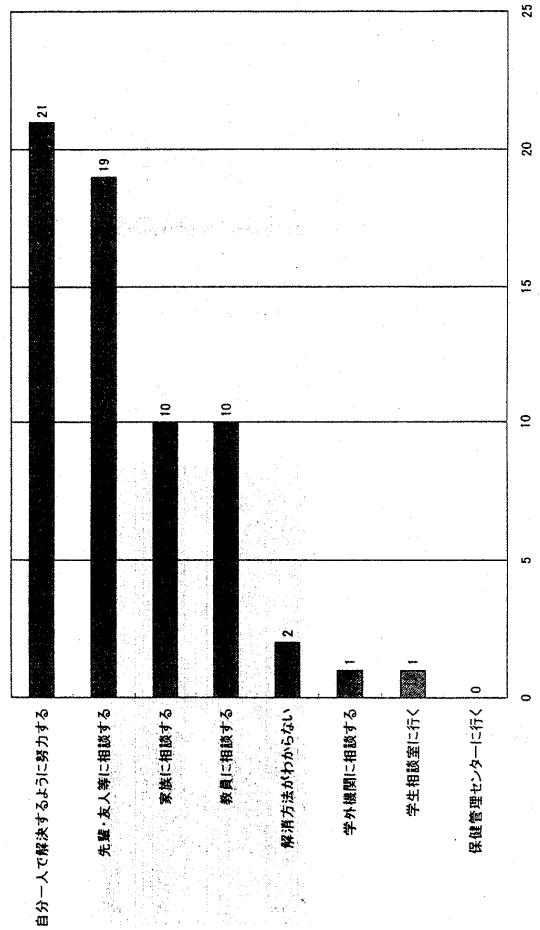
(表30)



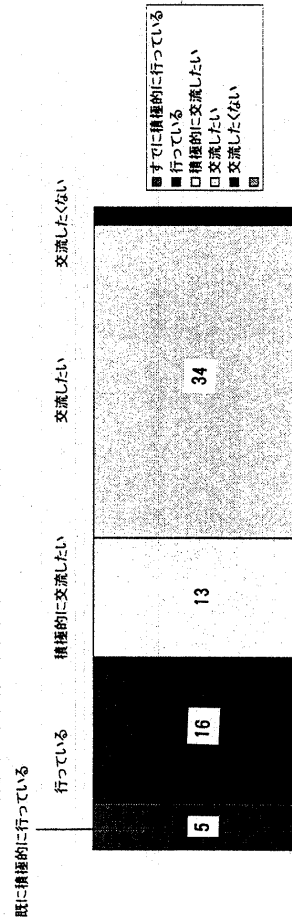
(表32)



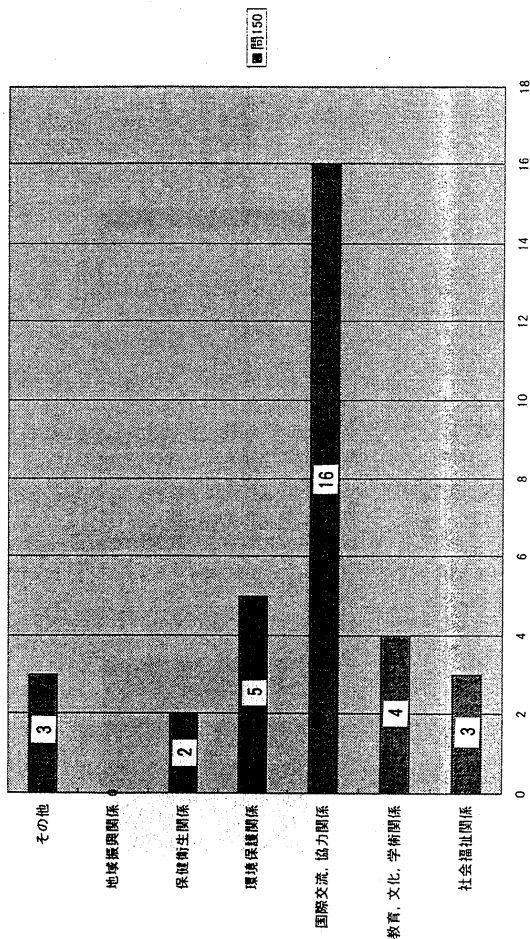
(表31)



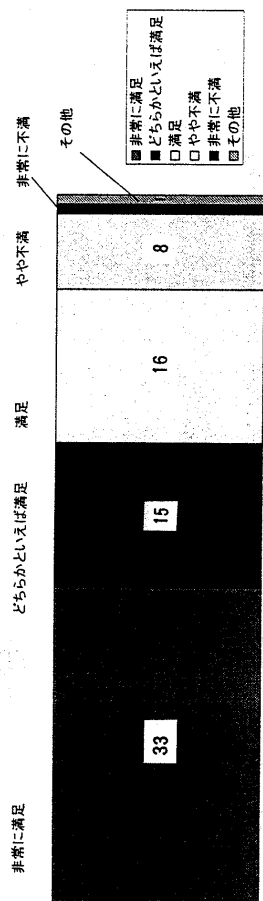
(表33)



(表36)



(表34)



(表35)

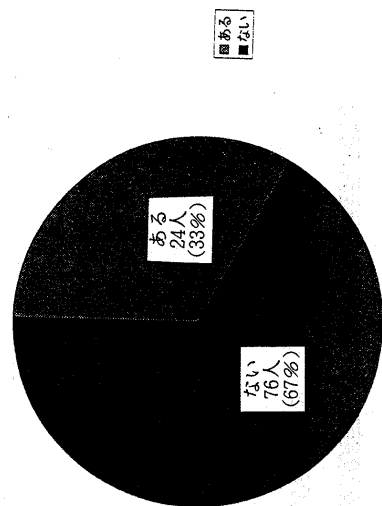
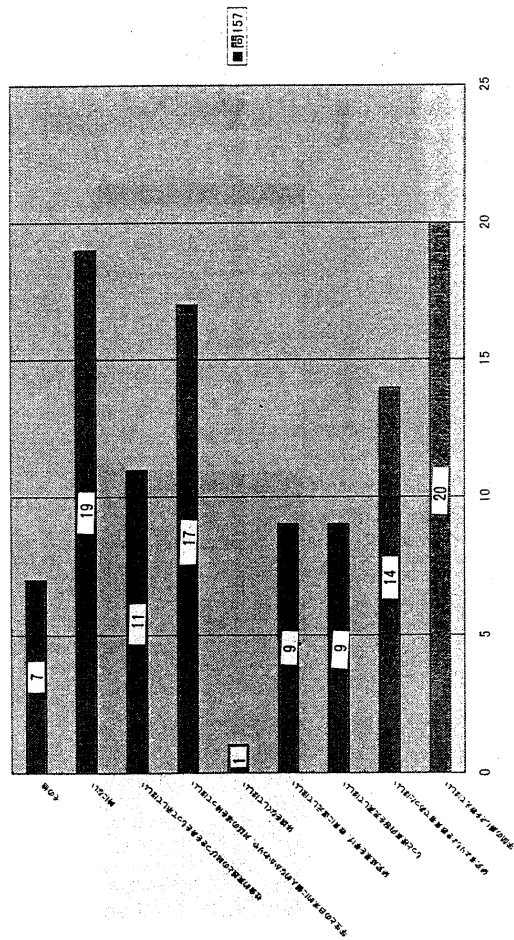
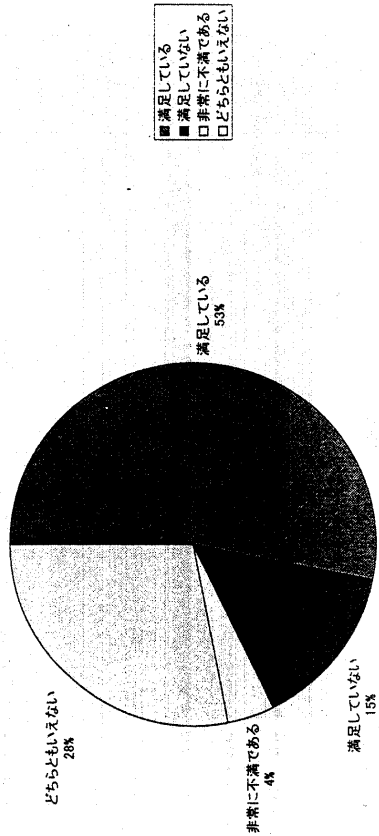


表35(問149)

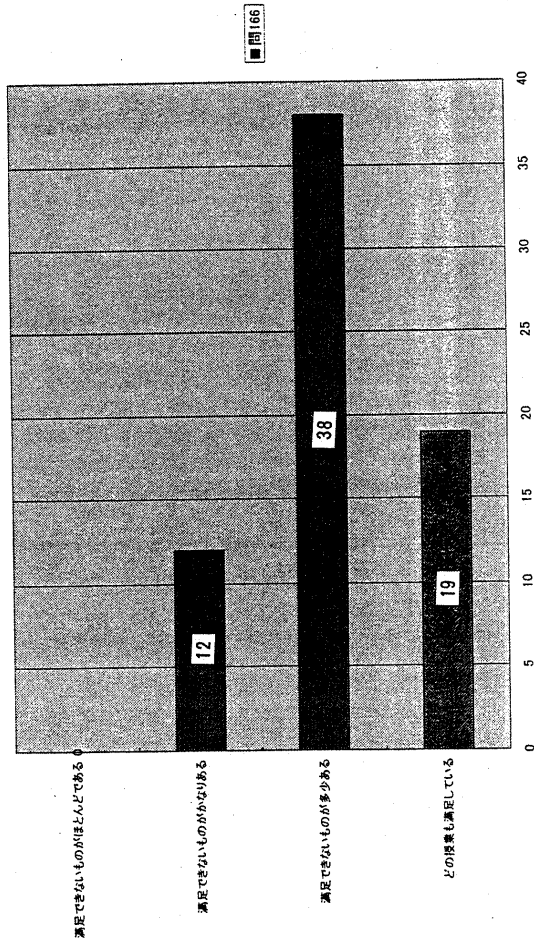
(表37)



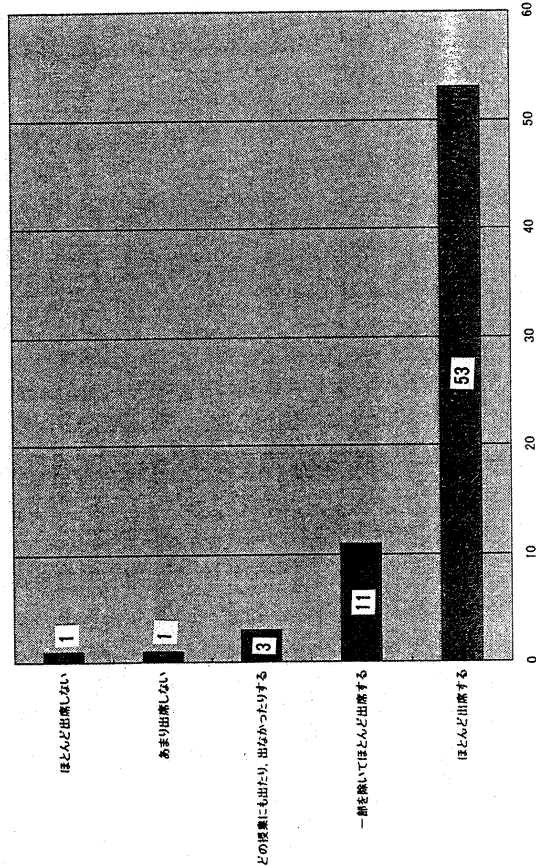
(表38)



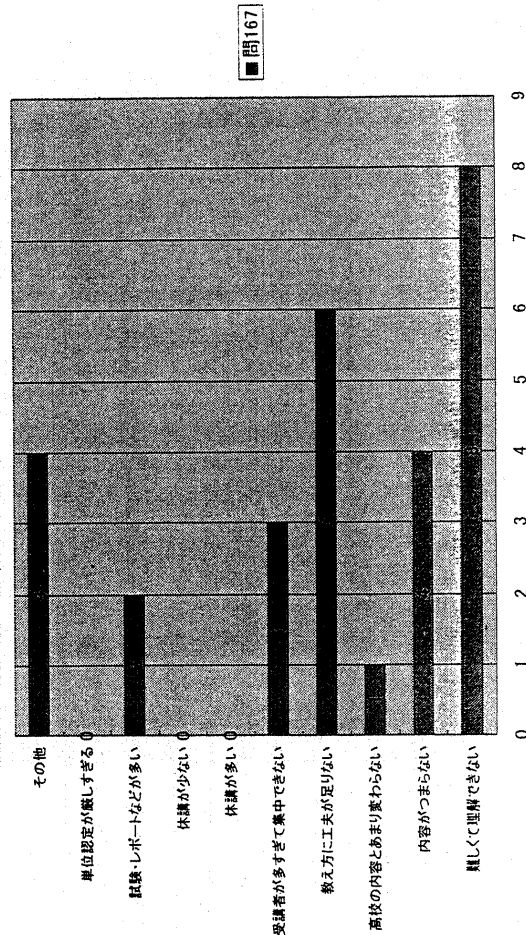
(表40)



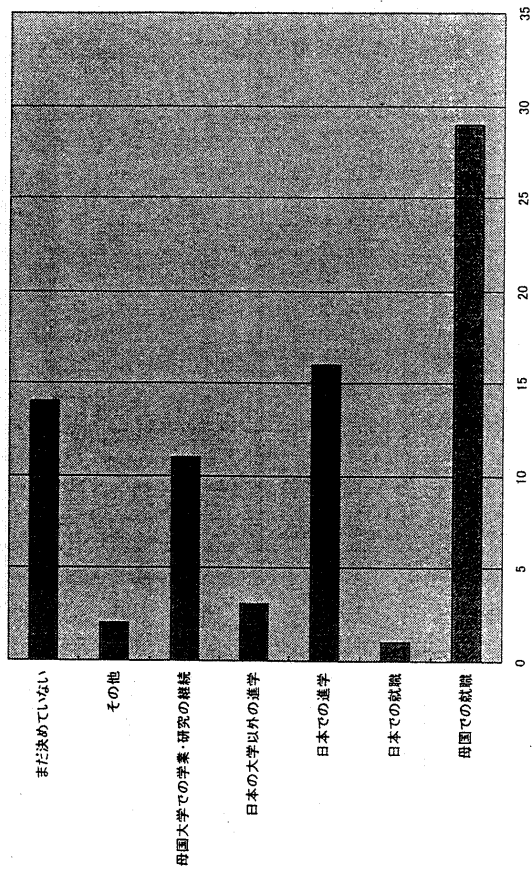
(表39)



(表41)

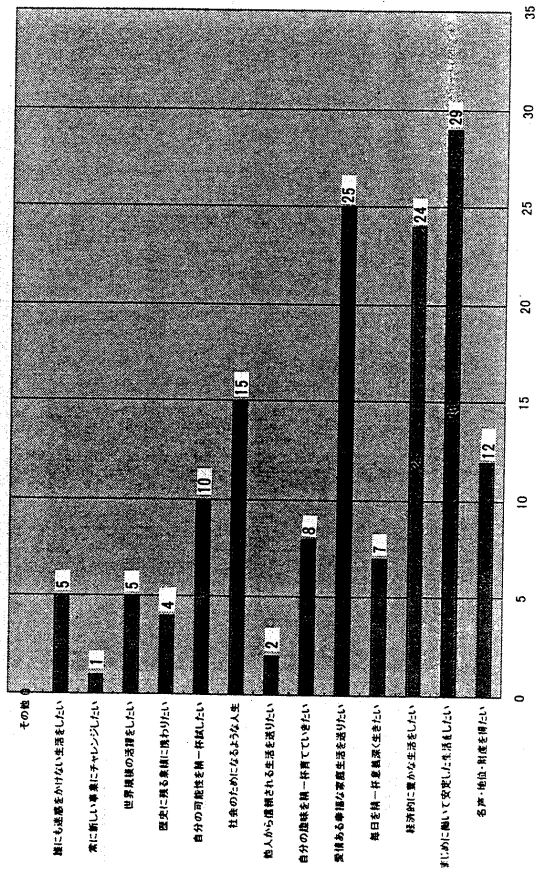


(表42)



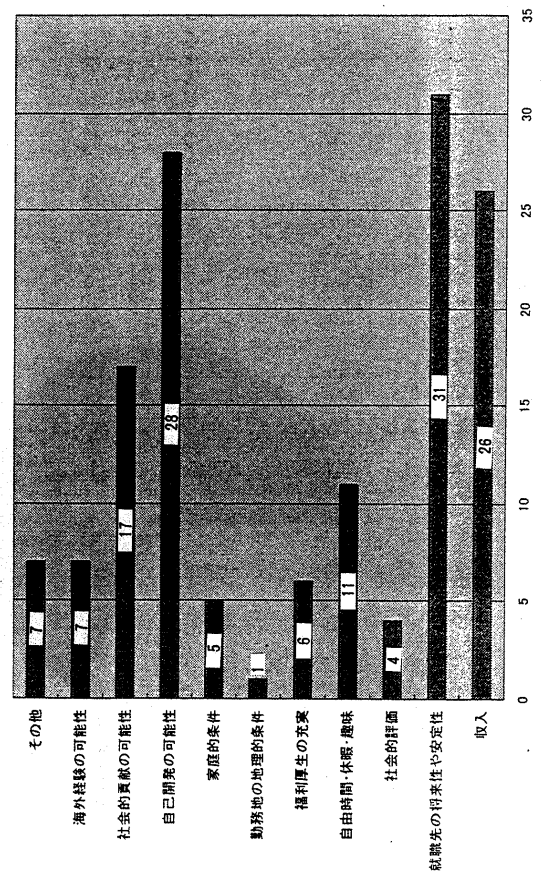
■ 問170

(表44)



■ 問175

(表43)



■ 問174